

終末に関する一般の預言解説の間違いの原因

このレポートは「79 「末の日」と「終わりの日」の相違点」という記事の改訂版という位置づけになります。

聖書預言の中に「終わりの日」とか「終わりの時」という言葉が数多く使われていますが、例えば、ミカ4:1の「末の日」（口語訳）と訳されているヘブライ語は、「バ・アハーリート ハイヤーミム」と記されており、この単語の語根はそれぞれ アカーリース、 ヨームであり、英語ではLast daysと訳されています。

「最終部分の日々」という意味です。結論的な事を先に述べることにはなりますが、ヘブライ語聖書の中でこの「末の日」（ヘ語：アカーリース、 ヨーム）と表現される場合、それは基本的に（ハルマゲドン前）の「終わり」の事ではなく、神の創造の安息日の「最終部分の日々」つまり千年王国時代に成就する事柄として述べていると捉えてほぼ間違いないと思います。

「アカーリース ヨーム（以降「末の日」と表記）」というヘブライ語が用いられている主な聖句は次の通り：

イザヤ2:2。 エレミヤ23:20、 30:24、 48:47 49:39。 エゼキエル38:16。 ホセア3:5。 ミカ4:1。ダニエル2:28、 10:14。

これらの用例から、ほとんど共通しているのは、「末の日」に起きる事は、「ユダヤの民を散らされた地から必ず呼び戻し、イスラエルに住まわせる。みな流れのように主（Yah-weh）の山に向かう。異邦諸国民も神を認め、神にまみえようとする。」という、約束され続けたきた預言が成就するときであること示しています。

（この点で例外的と思えるダニエル書については、後で詳述します。）

一方、ヨエル書など、ハルマゲドンに直結する「終わりの日」と日本語訳されている語は「主（Yah-weh）の日」（ヘ語：ヨーム イエホーワー）（以降「YHWHの日」と表記）という表現で記されています。

「YHWHの日」について述べている主な聖句は次の通り：

イザヤ2:12、 13:6, 9。 エゼキエル13:5、 30:3。 ヨエル1:15、 2:1、 2:11、 3:14。 アモス5:18。 オバデヤ15。 ゼパニヤ1:7、 14。 ゼカリヤ14:1。

「末の日」が、「千年王国での記述である」というのは、ハルマゲドンの裁きの後、平和を回復した地において、イスラエルが神からの祝福を実現する出来事だからです。その典型的な一例を挙げておきましょう。

「終わりの日に、主の家の山は、山々の頂に堅く立ち、丘々よりもそびえ立ち、国々の民はそこに流れて来る。多くの異邦の民が来て言う。「さあ、主の山、ヤコフの神の家を上ろう。主はご自分の道を、私たちに教えてくださる。私たちはその小道を歩もう。それは、シオンからみおしえが出、

エルサレムから主のことばが出るからだ。主は多くの国々の民の間をさばき、遠く離れた強い国々に、判決を下す。彼らはその剣を鋤に、その槍をかまに打ち直し、国は国に向かって剣を上げず、二度と戦いのことを習わない。彼らはみな、おのおの自分のぶどうの木の下や、いちじくの木の下にすわり、彼らを脅かす者はいない。まことに、万軍の主の御口が告げられる。」(ミカ 4:1-4)

「末の日」は千年王国時代と述べましたが、実は、厳密に言うと、「[YHWHの日]」(世の終わりの最後にハルマゲドンがあり、神の王国が、それから千年に渡る支配を開始してゆくことになっていますので、「末の日」はその差し示す期間として大患難期をも含んでいるという認識で書き記されている記述もあるようです。

イスラエルの回復の成就期が「末の日」に起きると預言されていますので、「末の日」の目的そのものと、「YHWHの日」という裁きの日を同一視してしまいかねないので、そうしたな混乱を敢えて避けるために、基本的に、そのようなとらえ方で良いのではないかと思います。

言い換えますと、一般の聖書預言解説は、この「アカーリースの日」と「イエホワの日」つまり「末の日」と「YHWHの日」(世の終わり)を混同してしまっているために、預言成就のビジョンに矛盾や混沌とした部分が見られる原因になっていると考えられます。

実際、日本語で「終わりの日」と訳される語で示されている時節は、全く異なる次の3つの時点を指して用いられています。

一つは、テモテ第二 3:1 に代表される期間。

これはその時節にみられる人々の傾向を示すものですが、これは、いわゆる「終わりのしるし」として記述される福音書の中で「終わりはまだ」と言われる、前哨戦というか、いつからいつまでというような特定の期間ではなく、限定されている「終末期」までに見られる世の中、人々の特徴などを示す目的で記されています。

2つめは「終わりのしるし」として記述されている福音書のハルマゲドンに至る艱難期を期間を示すもの。この期間は、黙示録で表される、4頭の馬や封印、ラッパ、鉢などの災厄が示される艱難期についての描写と同期間であり、ネフカドネザルの巨像、獣、小さな角、荒廃をもたらす憎むべきもの、70 週など、ダニエル書の預言のほとんどを占める終末期と同じ期間でもあります。

そして3つめは、千年期というメシアの治める期間。

ともかく、これら3つの異なった期間がほとんど全部「終わりの日」というように訳されてしまっているため、同一視され判別が付かなくなってしまうゆえに、聖書預言の理解に大きな混乱が生じていると言えます。

一例を挙げれば、終末預言に関するほとんどの書物の著者、研究者は、ハルマゲドン前に各地からユダヤの民が帰還してくると考えています。そして神殿を建てると考えています。

「終わり」と訳されている 旧約 (ヘブライ語) / 新約 (ギリシャ語) それぞれの異なった単語
及びそれが指し示している3種類の異なった期間

主の日		末の日々	
Yah-weh	yō-wm	hay-yā-mîm,	bē-'a-hă-rîṭ
יהוה	יום	הַיָּמִים	בְּאַחֲרֵית
of the LORD	the day	days	in the last
イエホワー	ヨーム	ハイヤーミム	アカーリース

※「YHWH (主) の日」という表現では、主な聖句としてあげた下の全ての箇所で「ヨーム (日)」は常に単数形が使われています。

イザヤ2:12、13:6、9。
エゼキエル13:5、30:3。
ヨエル1:15、2:1、2:11、3:14。アモス5:18。
オバデヤ15。ゼパニヤ1:7、14。
ゼカリヤ14:1。

最終部分の日々		[世の] 終わり		
eschatais	hēmerais	synteleias	tou	aiōnos
ἐσχάταις	ἡμέραις	συντελείας	τοῦ	αἰῶνος
[the] last	days	the completion	of the	age
エスカテース	ヘメラ-	ステンレイアス		アイオーノス



※詳しくは「47 「終わりの日」の預言と「終わりのしるし」の相違点」参照してください。

ともかくこの「しるし」が見えない限り、終わりはまだだと、考えているようです。

「YHWHの日」に諸国民が一斉にイスラエルに向かいます。、ヨエルや、ダニエル書に記されている通りです。言わばそれは神の罨です。そこで引き起こされるのが、ハルマゲドンです。

「末の日」に見られるミカやイザヤにあるような、異邦諸国民が神を認めて、神の民に連なって、神を求めるためにイスラエルに向かう者などは、その「YHWHの日」の時点では誰もいません。全く正反対の動機を抱いて集まって来るのです。

端的に言えば、「YHWHの日」は神の裁きの日であり、「末の日」に起きること、悟ることとして示されているのは、回復、平穩を経験する。という内容なっています。

ではここで、後述するとお断りしていた、ダニエル書に現れる「末の日」について検証します。(なぜなら、「末の日」が千年期を示すなら、ダニエル書の預言が指し示す期間である終末期と矛盾するように思えるからです)

ダニエル書の「末の日」とは一

さて「末の日」という表現が用いられている記述の中で、少し異例なのがダニエルの2箇所の記

述です。ダニエル2書のネスカドネザルの金の像に関する記述と、10章の南の王と北の話しの部分です。

先ず、2章の「末の日」に関してさらに調べてみましょう。

「…しかし、天に秘密をあらわすひとりの神がおられ、この方が終わりの日[へ語：アカーリースヨーム（末の日）]に起こることをネスカデネザル王に示されたのです」（ダニエル 2:28）

「末の日が起こること」とはいったい何でしょうか。

金、銀、銅、鉄（後に粘土が混ざる）という4種類の金属からなる巨像で、金の頭はネスカドネザル王自身だと言われています。

「あなたの後に、あなたより劣るもう一つの国が起こります。…」（ダニエル 2:39）

という風に順に説明されてゆきます。

それで、この金の像はいつから存在するかというと、この出来事のその時点から（その時はまだ頭だけですが）存在します。

では「終末期」に起きることの中に「ネスカドネザル（バビロニア）の支配」が含まれるのでしょうか。「終末期（ハルマゲドン前の艱難期）」に像が造られるのでしょうか。そのようなことはありません。

厳密に「終末期」に起きること、それは、石が像を倒して全地に満ちるという出来事です。

この預言は、「倒して終わり」ではありません。石は山となってその後「定めのない時に至る」という預言を含んでいます。

「…その像を打った石は大きな山となって全土に満ちました。」（ダニエル 2:35）

「この王たちの時代に、天の神は一つの国を起こされます。その国は永遠に滅ぼされることがなく、その国は他の民に渡されず、かえってこれらの国々をことごとく打ち砕いて、絶滅してしまいます。しかし、この国は永遠に立ち続けます」（ダニエル 2:44）

それで「末の日（アカーリースヨーム）」に起きることというのは、単に「主の日」に諸国が裁かれることだけを示しているのではなく、むしろ、その後が重要で、その王国は千年にわたり人間的な政府を超越した働きをするということを示しているのです。

さてでは次に、10章の記述ですが、こう書かれています。

「終わりの日[へ語：アカーリースヨーム（末の日）]にあなたの民に起こることを悟らせるために来たのだ。なお、その日についての幻があるのだが。（ダニエル 10:14）

ここで、み使いは、単に「末の日に起きる事を伝えに来た」とは述べていません。末の日に起きる事を、「悟らせるために」ということです。それは、つまり、起きる事柄の出来事だけでなく、その意味する所をダニエルに理解させるということです。

これは「ペルシャの王キュロスの第三年」のことでした。（10:1）

み使いは経緯について話した後、「末の日」に関する本題に入ります。

「私は、あなたに真理を示す。見よ。なお三人の王がペルシヤに起こり・・・」(11:2)

「末の日に起きる事」と断って起きながら、話の内容は、現時点からの連続した構成になっていることが判ります。そして、その後、ギリシャが現れ、4つに分かれ、その中から、対抗し合う、南の王と北の王が出現し、北の王は、荒廃をもたらす者を据え、イスラエルに入り、諸国民が押し寄せ、終わりに至る事。

さらにミカエルが立ち上がり、聖徒が迫害され、「それは、ひと時とふた時と半時である。聖なる民の勢力を打ち砕くことが終わったとき、これらすべてのことが成就する。(ダニエル 12:7) という風にダニエル書の最後までずっと続きます。

この歴史の流れの全期間を指して「末の日」と呼んだということはありません。

むしろ、み使いの情報つまり、「これから、起きてくる事から、自分の死んだ後のずっと後の時代に至る時代の中での北の王の言動や、その顛末に関する情報こそが、「末の日」に起きる事の意味を理解するための重要な要素である事を悟る。というのがその意味するところでしょう。

分かり易く言うと、これらの情報があつて初めて「末の日に起きる事」の本当の意味を理解できるようにされていると言うことです。

実際にその「末の日に起きる事」というのは、主の日に「北の王」が滅ぼされた後に生じる、イスラエルにとっての喜ばしい回復のことでしょう。

「私はこれを聞いたが、悟ることができなかつた。そこで、私は尋ねた。「わが主よ。この終わり（へ語：アカーリース；after-part）は、どうなるのでしょうか」。

彼は言った。「ダニエルよ。行け。このことばは、終わり（へ語：カテス；end）の時まで、秘められ、封じられているからだ。

多くの者は、身を清め、白くし、こうして練られる。悪者どもは悪を行ない、ひとりも悟る者がいない。しかし、思慮深い人々は悟る。

常供のささげ物が取り除かれ、荒らす忌むべきものが据えられる時から千二百九十日がある。

幸いなことよ。忍んで待ち、千三百三十五日に達する者は。

あなたは終わり（へ語：カテス；end）まで歩み、休みに入れ。あなたは時の終わりに、あなたの割り当ての地に立つ」（ダニエル 12:8 - 13)

ここで、具体的にどんなことが生じるのかは敢えて伏せてあり、その記念すべきスケジュールだけが示されていますが、この1290日の意味する所、1335日に達して幸いを得るという出来事こそが、「思慮深い人」だけには、「末の日」（千年王国）の始まりにあつて、その期間の本当の意図や目的が理解され、その実質的な祝福を経験することによって「末の日」を悟る。ということであり、ダニエル自身もそれを保証された一人であるということでしょう。

それで、例外的に思えたダニエル書の2つの「末の日」もやはり千年王国の祝福期間を指して用いられていると結論することができます。